

プロジェクト課題No.2 いちごの栽培技術レベルアップによる収量向上



対象：階上いちご第2復興生産組合，シーサイドファーム波路上株式会社

計画期間：令和4年度～令和5年度

チーム員：◎柏谷，平，降幡，櫻田，猪野

1 課題の背景（対象の概要）

○階上いちご第2復興生産組合（気仙沼市）

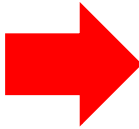
- ・平成25年設立，構成員3名，1名あたりの栽培面積は約20a
- ・平成26年からいちごの栽培を開始した。
- ・令和3年度に新たな生産者が1名加入している。

○シーサイドファーム波路上株式会社（気仙沼市）

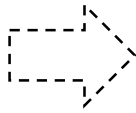
- ・平成28年設立 ねぎ・いちごの複合経営体 栽培面積約50a
- ・平成30年からいちごの栽培を開始した。
- ・いちご部門は，若手社員2名を中心に生産が行われており，年々生産量が上がっている。

2 課題の背景（ねらい）

- ・令和3年度の階上地区全体の平均収量は3.6t/10aである。
- ・このうち、「階上いちご復興生産組合」は栽培技術レベルが高く、平均収量5.0t/10a程度と高い収量を確保している。
- ・一方、対象生産者の平均収量は3.0t/10a程度である。
- ・生産者間には約2.0t/10aの収量差があり、この収量差が課題となっている。
- ・新たな生産者が加入しており、階上地区のいちご生産者が相互に技術交流する契機となっている。



対象生産者の栽培技術レベルの向上及び生産者間の交流を促進させるような普及活動が求められてる。



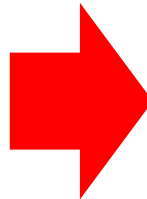
○活動を通じて
・いちごの増産
・営農の継続


〈参考〉 現在までの普及センターの活動

【重点活動】 対象：階上地区のいちご生産者

令和2年度：環境モニタリングデータ活用によるいちごの収量向上

令和3年度：環境モニタリングデータ活用によるいちご収量の高位平準化

 ・データを活用した栽培管理指導により収量向上に一定の効果あり。

 ・炭そ病の防除等，基本的な栽培管理に課題がみられた。

◎ 対象者を限定し，多様な普及活動をプロジェクト化して支援する

【プロジェクト課題】 対象：階上いちご第2復興生産組合，シーサイドファーム波路上株式会社

令和4～5年度：栽培技術レベルアップによる収量向上

3 設定した目標

定性的目標（令和4年度）

- ① 年間を通じた栽培技術支援により基本的栽培技術が習得される。
- ② 環境データ等の先進的技術を活用した栽培管理への理解が深まる。
- ③ 生産者同士の交流により栽培を客観的に見る機会が増え、技術習得に向けた意識の醸成が図られる。

定量的数値目標

1 月末時点の収量（総収量目安）

0.9t/10a 【R3 年度】 ⇒ 1.0t/10a 【R4 年度】 ⇒ 1.1t/10a 【R5 年度】
(4.5t/10a) (5.0t/10a)

活動事項

基本的栽培技術
習得支援

先進的技術を活用
した収量向上支援

生産者間交流支援

4 これまでの活動状況①

基本的栽培技術習得支援

○巡回指導を中心とした技術習得支援

- ・週1回程度巡回し，栽培開始から収穫終了までの栽培管理指導を行っている。普及センター職員だけでなく，階上地区の先進生産者にも定期的にご協力いただき，生産者目線から助言をいただいている。

⇒栽培管理について客観的に見る機会が増え，改善が必要な点も明らかになった。



4 これまでの活動状況②

基本的栽培技術習得支援

○適期の栽培管理をとりまとめた「気仙沼いちご便り」の発行及び活用

- ・階上地区のいちご栽培において、薬剤の選定や今後の栽培管理のポイントをとりまとめた「気仙沼いちご便り」を月1回程度発行し、この資料を活用した巡回指導を行っている。

⇒計画的に作業を進めるための資料として活用されている。

気仙沼いちご便り【Vol.3】

栽培終了に向けた灌水設定・次作に向けた準備

気仙沼農業改良普及センター 2022年5月27日

いちごの農業の使用回数は、親株からランナーを切り離した時点でリセットされます。

1 栽培終了に向けた灌水設定について

ヤシガラ培地内の肥料分を株に吸収させ、次作に残さないことが重要です。出荷終了の1週間～10日前から養液濃度を徐々に下げ、最後は水に切り替え灌水しましょう。

〈栽培終盤の「とちおとめ」灌水設定例〉

日付	5月30日	6月5日	6月10日	6月20日
目安	出荷終了10日前	出荷終了5日前	出荷終了	片付開始
EC	0.7	0.3	0.0 (真水)	0
灌水量	360ml/1株/1日	360ml/1株/1日	360ml/1株/1日	0

2 次作に向けた準備について

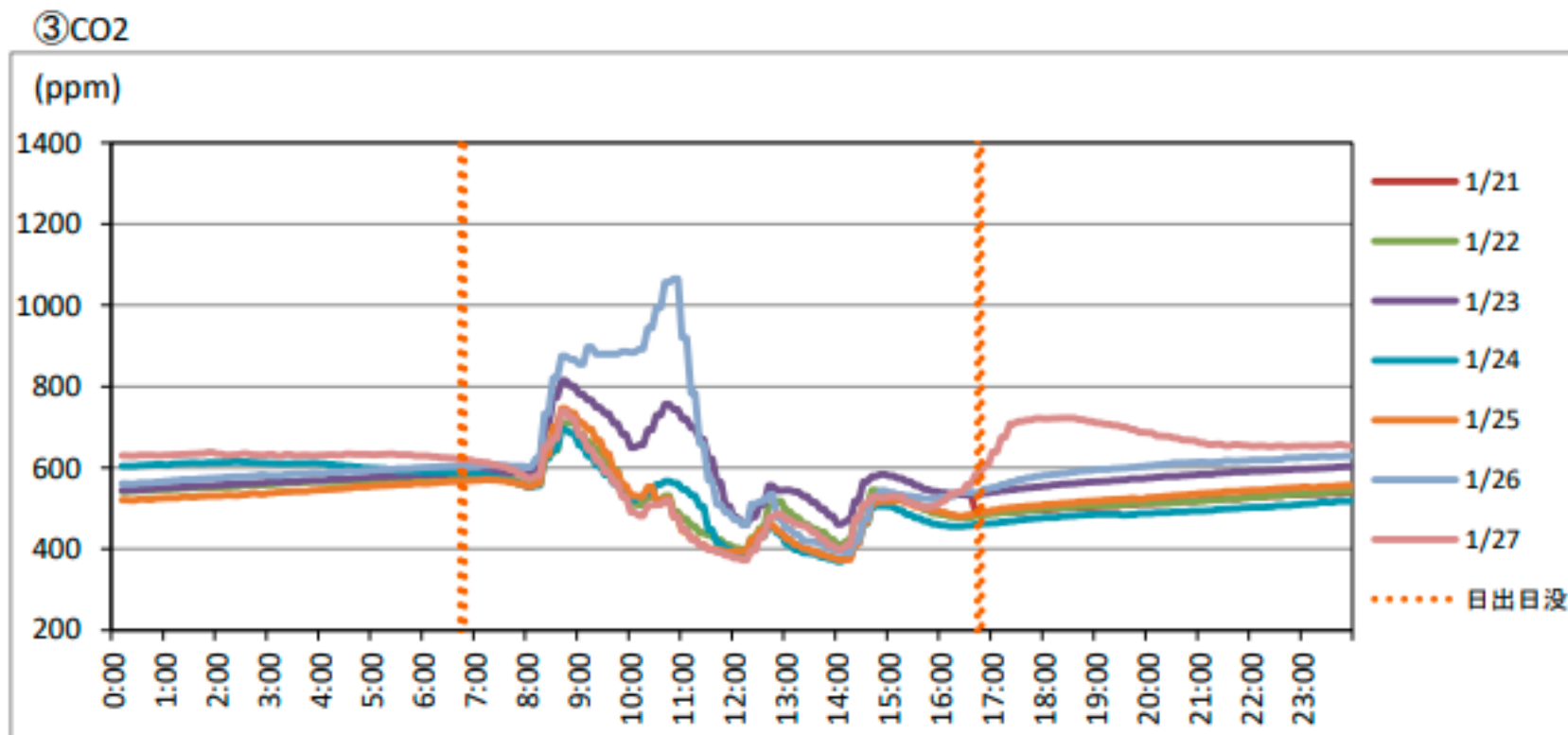
定植日を予め想定し、逆算して作業スケジュールを組みましょう。短日処理栽培において、階上地区の定植適期は例年9月10日前後です。短日処理期間を30日と

4 これまでの活動状況③ー①

先進的技術を活用した収量向上支援

○環境データを活用した高度な栽培管理の推進

- ・環境測定機器を設置し，取得した温度・湿度・CO₂ 等の環境データをとりとまとめ，「ウィークリーレポート」にまとめてハウス内環境の変化を見える化した。



4 これまでの活動状況③ー②

先進的技術を活用した収量向上支援

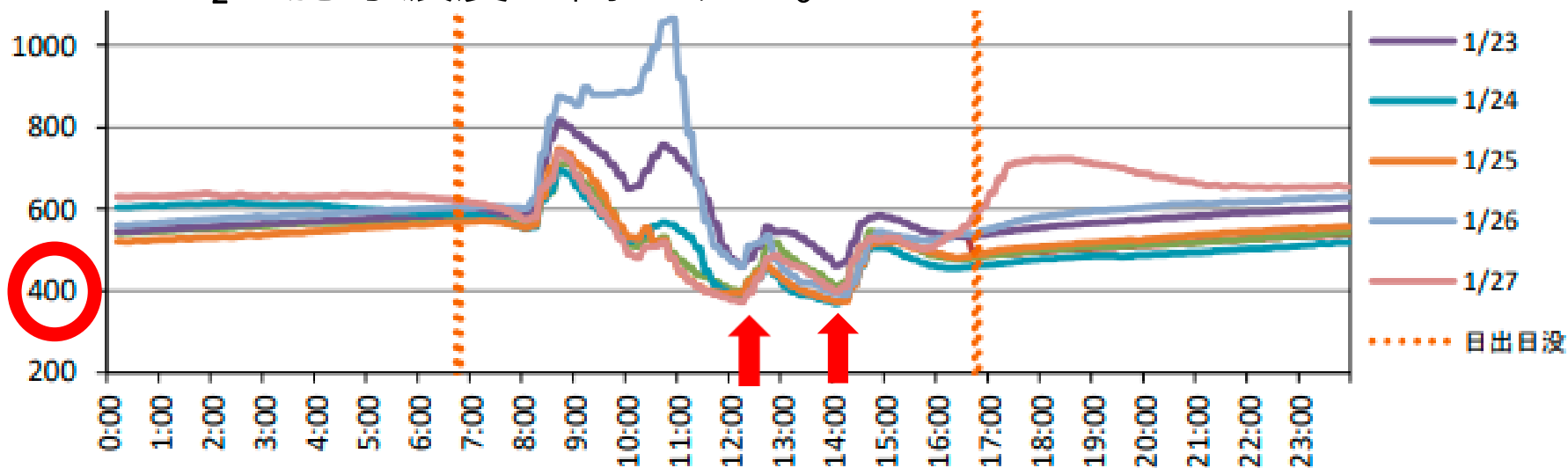
例) CO₂データをまとめたウィークリーレポート

→日中400ppmを下回る時間がある【 ↑ 】

→CO₂不足による光合成効率の低下 → **収量の低下**

対策) ・不足する時間にCO₂の施用回数を増やす。

・CO₂の施与濃度を高くする。



⇒ハウス内環境の見える化により栽培管理の改善点が明確になった。

4 これまでの活動状況④

生産者間交流支援

○県農業・園芸総合研究所への視察研修会の開催

⇒先進的な取り組みに興味を持つとともに、個々の課題について共有する場になり、参加者全員で盛んに意見交換する様子がみられた。



県オリジナル品種の育成（左）及びバイオマスボイラー（右）について説明を受ける生産者。

4 これまでの活動状況⑤

生産者間交流支援

○いちご農薬研修会の開催

- ・日本化薬株式会社の技術担当者を講師として招き，病害虫防除についてご講演いただいた。

⇒生産者間で活発な意見交換が行われ，有意義な研修会となった。



令和4年度 気仙沼・南三陸いちご研修会

2022年7月

日本化薬株式会社 アグロ事業部

営業部 マーケティング担当

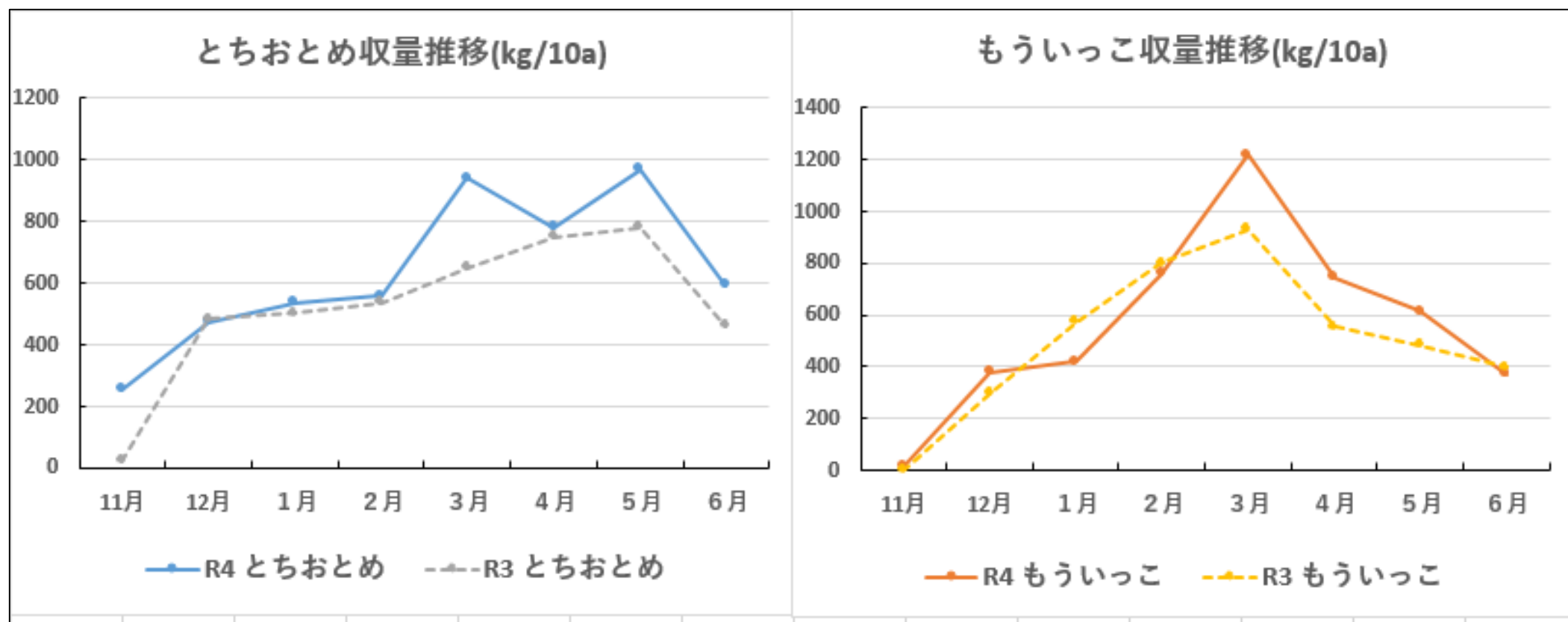


5 これまでの活動成果①

○収量の向上

- 対象生産者のうち、**最大で前年比17%の収量向上がみられた**。また、対象生産者の平均収量は3.8t/10aとなり、前作の地区平均3.6t/10aを上回った。

- 〈要因〉
- 環境データを活用した効率的なCO₂利用による栽培管理の励行
 - 営農意欲の高い新規生産者の栽培管理の徹底



5 これまでの活動成果②

○令和4年度作の健全な子苗の確保

- ・例年，炭そ病の多発等により健全な苗の確保に苦慮していたが，今年は「気仙沼いちご便り」に基づく適切な薬剤選定の実施や農薬研修会の開催等により，防除の徹底が図られたことで，健全な子苗の確保が行われた。

対象生産者において，炭そ病の発生は現在まで確認されていない。



6 今後の活動について

○適期定植の励行

- ・花芽検鏡による分化確認を行い，9月上旬の適期定植により収量確保を支援する。

○環境データを活用した栽培管理の実施

- ・ハウス内環境及び植物の生育変化をデータで捉え，いちごの生育にあわせた適期の加温・電照・CO₂施用による，収量向上を支援する。

○先進生産地への現地視察等

- ・さらなる栽培技術の向上や外部との相互関係の構築を目的として，亘理・山元地域での先進生産地への現地視察を秋頃に計画している。

⇒上記の活動を通じて，令和4年度は1月末時点の収量1.0t/10a（総収量4.5t/10a）を確保する。

7 対象者からのご意見

今作の目標としていた収量よりも多く取ることができた。改善が必要な点も見えてきたので、引き続き支援をお願いしたい。

(階上いちご第2復興生産組合員)

